

# 図書館だより

第 1 号

1981年6月1日

発行所  
津市一身田中野字西付157

三重短期大学附属図書館

図書館だより発刊によせて

三重短期大学附属図書館  
館長 瀬島 順一郎

此度、皆様のご協力により、図書館だよりを発刊させていただくことになりました。長年の懸案でありましたが、ようやくここに発刊の運びとなり、館員一同うれしさよりも何かほっとした思いをしている次第であります。今後、三重短期大学附属図書館としての大切な機能の一端を担うものとして発展することを望んでおります。

図書館の業務は今さら言うまでもないことですが、情報の収集、書物の保管、管理といった中心的な仕事の他に、より良く利用されるためのサービス業務といったものも含まれてきます。実際良い図書館というものは、蔵書の数、価値だけでなく、利用者が使い易く、コピーサービスその他の点で設備がよく整っているものですが、さらに加えて、必ず良い図書館報を持っております。

一般図書館でなく、特に大学図書館では、利用者の範囲が大学関係者が中心となってきます。したがって、図書館に入った新しい本の情報を何らかの形で提供する事は、研究を進める上でも意味あることだと思われれます。

このように、館報が情報の情報といった役割を果たすという一面を持ちながら、利用者や図書館（大学であれば、学生と教員と図書館）とのコミュニケーションといった役割も持っています。

この図書館だよりが、今後、三重短期大学での学生、教員、図書館の、三者間のミニコミ紙にでもなればこれにすぐる喜びはありません。

このような「図書館だより」の発刊は、最初の計画や思惑がどのように反映され、さらに発展するかが不明であるという、将来への不安を含んでおりますが、「図書館だより」は、図書館が自ずから生み出す情報の唯一のものであります。これによって図書館は静から動へ、さらに受身から能動へと脱皮して行くステップボードにしたいと思っております。

内容については、まだまだ検討の余地はありますが、さしあたり、巻頭言として本についてのエッセイや、図書館に関する思い出のような一文を掲載し、さらに「書評」や「一冊の本」といったものも含め、図書館からのお願いや、学生からの要望といったコーナー

も設けて行きたいと思っております。新刊書や新着図書を紹介もできる限り多く入れたいと思っておりますが、紙面の都合で割愛するものも出てく

ると思っております。

現在のところでは、予算の関係で、タイプから印刷まで図書館の事務室で行う予定ですので、紙質も良いものではありませんし、印刷ミスも多数出るかと思っております。このささやかな営みの始まりに対して、寛容な目で見ていただきたく思います。

このような、図書館だよりの性質からしますと、月に一回の発行が望ましいのですが、色んな制限もあり、さしあたって、年二回から、季刊へともって行きたいと思っております。まだ一步を踏み出したばかりで、これがどのように発展するかはわかりませんが、図書館としては、読んでいただいて面白い内容にしたいと思っておりますので、皆様方の御協力と、厳しい御批評をいただければ幸いです。

## 巻頭言

「図書館だより」発刊にあたって

学長 伊藤 幸一

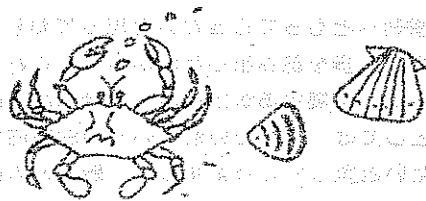
こんど、本学図書館で書籍についてのいろいろなニュースを伝えようという企画を聞いて、まことに喜ばしい。

学生諸君にとって、書籍を通して得る知識が、まことに重要な教育部門をなしていることは、ここに改めてのべるまでもなからう。

ある大学の入学式で、学長が、訓辞で、入学生に対して「諸君は、まず、無駄読みをすることに努めよ!!」といわれた。このところ、テレビの影響で、学生が読書に寝食を忘れるという話はあまり聞かなくなった。大いに、この学長訓辞は、傾聴すべき味のあることである。以前に、大学の図書館に来て、読書にふけて、とうとう講義に出席しなかった学生がよくあった。ほめられない話であるが、バイトが忙しくて講義に出席しない学生よりましだ。わたしをして言わしめれば、本学の学生は、もっと、もっと、図書館を利用し、読書にふけり、書を通して、自づから教育をすることに努めて欲しい。

もっとも、そのためには、もっと本学の圖書の充実につとめるべきだろう。前学長の丹羽友三郎先生は、本学図書充実にとして、多額の寄贈をして下さった。喜んでいる。今後、われわれは、この件について、いかにきびしい財政事情とはいえ、努力していきたい。学生諸君も、それにこたえ、この読書を通して、いわゆるセルフ・エデュケーションに努めて欲しい。

以上のような事情を背景として、こんど、本学図書館で、いろいろな新刊書その他のニュースを、いち早く諸君に提供しようとする計画をして、本当に嬉しい。諸君は、この本学図書館の企画の趣旨を解し、大いにこれを生かして欲しい。期待する。



「図書館だより」にとりあえず期待したいこと

図書委員長 岡本 祐次

いよいよ文献、情報の洪水の中にどっぷりつかってしまった現代社会にあって、それらを体系的に備え、人びとが利用するうえで、経済的、技術的に個人ではおおよそ不可能であることを可とし、今日の文化の中に活かす役割を演ずる機関、図書館の存在はとりわけ重要である。

すなわち、現代社会をして、ひと「図書館の時代」といわれる所以である。

ところで、図書館にもいろいろの種類があり、それぞれ独特の役割を担わされている。

いま大学図書館の役割をみるに、それは、おおよそつぎのごとくであろう。すなわち、勉学および教育、研究の促進を助するべく、経済的、時間的なロスを排し、個人ではどうも果しえない目的を、それも即時的に解決すること、いわゆる interpreting な役割、これであろう。

しかしながら、こんにちわが国大学図書館は、一般的にみて、大学行・財政の貧困のゆえに、本来の機能のほとんどを失し、したがって、これまた本来担うべき役割をほとんど演じえないでいる。

ましてや、わが短期大学およびこれと同種、同期模の大学のごとく、極度に予算の制約を強いられるところでは、なおさら、そうである。

もちろん、だからといって、ただちに、これを本来の姿に導こうとしても、諸般の事情を考えれば、しょせん不可能事である。

そこで、わが大学図書館などにあっては、文化的機能を念頭しながら教育機能をまず正常に導き、したがって勉学および教育の interpreting な役割を演ぜしめる方向に歩みと接近せしめるべく、その根本的原因たる行財政の貧困が少しでも改革されんことを期さねばなるまい。

ためには利用者（とりわけ数において圧倒的である学生）が、問題点を正確に認識し、その「ナマ」の声を具体的な要求にと結びつけることこそが肝要である。

そうではあるが、ここに大きな問題が存する。すなわち、こんにち学生一般は「図書館が嫌い」であり、本来の図書館利用者の数は実に少ないということである。いわんやわが大学生においておや。

よって、いまここに、念願かなって創刊のはこびとなった「図書館だより」にとりあえず期待したいことは、それが、図書館発展の原動力となるべき「図書館ずき」の学生、本来の学生利用者の数を大いに増してくれ、図書館と学生を結合せしめる（図書館はそもそも諸資料と利用者をつなぐことを本務とするのだが、その前座として）よき紐帯役を演じてくれること（そして、そうなるように編集上の趣向がこらされんこと）、これである。

## → 冊の本

法経学科長 鷲田小彌太

本は読む。だがどうい紙魚の類ではない。いたし方なく手にするのがほとんどだ。書くためにというのが情けないが常態だ。今年一月からあるミニコミ月刊誌に十五枚程度の「話題の書物・解剖レポート」を連載している。これは大要だが異境に旅するの感があって面白くもある。それでいきおい「専門」外の話題の本をかかえこむ回数が増える。しかしこの傾向はこの連載が契機となったというわけではない。

北海道の石狩郡白石村字厚別に生まれた。今は札幌市に編入されて、一大住宅街になりはてたが、有数の水田地帯であった。田舎であったこと、商家に生れたこと、敗戦直後に学校教育を始めたことなどで、とにかく活字を渴望していた。本らしいものはほとんどなかったのだ。

本は自分で買って読んだ。買う、これが第一歩だ。だが、生来がケチなのか、つい躊躇してしまう。それでたいした本は読んでいない。その中からの「一冊の本」。

谷沢永一「意識のある迷路——現代日本文学史の側面」(関西大学出版、広報部、昭和50年1月10日) ※書名は開高健の発案になるという。富士正晴に言わせれば、「真実を

ごくごく細部に至るまでクッキリさせたい人間」である谷沢は、「後年ますますクッキリした輪郭から肉が外界へはみ出し、一種不気味なあいまいな、つかまえにくい実体となつて行く開高健にとって、実にほかに得がたい跳ね板」(「極楽人ノート」、六興出版、昭和54・6・25)だそうなの。

「ごく小さな声で眩かせていただくならば、そもそも文学研究なるものには、法解釈学などとは根本的に異なつて、体系や総合や首尾一貫性や包括性や、すべてに荷蕩なく行き渡る阿彌陀さまの御慈悲のような心遣いは、始から全く無用なのであつて、箇々のエッセイその一冊ずつの内容だけが問題となるのみ、文学的思考の核は、あくまで個に執つて個を廻り下げる偏癖のなかに溜んでいるのではなからうか、そう私は密かに信じている。」

この「後記」の眩きは、「文学的思考」の極北にあるとみなされている「哲学的思考」にとって「実にほかに得がたい跳ね板」以上のものである。谷沢は、長短の関係なく、すべての実作によってこの一種傲慢ともいえる眩きの実行をわれわれの前に開陳する。戸坂潤が「書き下し」ではなく「論文集」をといつたあのリアリテーがそこに息づいている。

谷沢の書いたものは、今の私の間尺に合わぬと思うものをも含めて、みな読みたいと思つている。その批判と論理性を自分の身の内に養いたいと念じている。そのためにもごくごく小さな声ではあれ書き始めた。その延長線上の「レポート」である。このエッセイもその一つだ。(昭和56・5・17)「法経科教授、法哲学」

## 告知板

夏期休業に伴う図書長期貸出を行います。1人3冊以内。7月6日～9月5日までの期限です。海に山に、そして読書の計画に入れてみては!!

# 新刊紹介

川原栄峰著「ハイデッガーの思惟」

(1981・4・15 理想社)

山田 全紀

本書はその序文によれば「著者が昭和五十年に早稲田大学大学院文学研究科へ提出した学位論文を基礎としており、さらに同年以来刊行中のハイデッガー全集の従来は未公刊だったものをも「検討して論文に手を加えて」ようやく本年の四月に刊行されたものである。こう言えばおのずから想像されようが、本書は738頁のヴォリュームで、手にすればこれはまさしく博士論文の重みを有する。だからまた、さぞかし堅苦しくて読みにくかろうという予想もなりたつ。ところが、実はそれがそうではないのだ。この本の「相当のヴォリューム」については著者自身が序文でも後書きでも「ただただ恐縮のほかはない」と言うところにすでに著者その人の人柄を彷彿させて、これはなぜかその外観のいかめしさと裏腹の不思議なやさしさを備えた大著なのである。

では、その不思議なやさしさの印象を与えているのは何であろうか？それは何よりもまず日本語の自然さである。というのも、われわれ日本人にとってハイデッガー哲学のむつかしきとは、何よりもまず、それを日本語に翻訳することのむつかしさだからである。著者は、同じ理想社刊行のハイデッガー選集の名訳を初めとする数々の翻訳、論文、著作を通じて、一貫してハイデッガー哲学における術語を日本語になじませようとする努力を惜しまなかった人であるが、そういう努力の積み重ねがしからしむるのである。もうこれ以上は日本語にならないという理由から原語の発音どおりのカタカナ書きのまま使用される術語も、なぜか不思議に本書の中では日本語としてふさわしいものに思えてくる。「フオアハンデンサイン」、「ソルゲ」、「トランスツェンデンタール＝オントローギッシュ」ここでこう書けると奇怪な印象を与えるこれらの術語がこの大著の中では無理に

日本語にするよりもこのままで自然なおさまりを見せているのである。

さらには、日本語の自然さと相まって本書の構成の明確さが、そういう印象の形成に一役買っている。緒論を受けて第一部が「世界-内-存在=居住」、第二部が「住居説」であるが、一貫して主張され続けるのは、「存在=住む」という「思惟の事柄」である。全篇を通して、「存在者の存在を初めからフオアハンデンサインと思いこんでしまっている」形而上学を超越してヘルダーリー的に「根源に近く住む」ことを求めるハイデッガー像が浮きぼりにされている。「ケーレ論議」に関しても、レーウイトからクチュリエにいたるまでの解釈を紹介した後で、「誰れもがヘルダーリー-ハイデッガー的〈住む〉に注意していない。ゲシツクの向きの転回ということとヘルダーリー的〈住む〉をはずしてしまったら、ハイデッガーの〈ケーレの思惟〉は実質なきものになってしまう」と「住居説」が強調される。「存在=住む」を基準にして、言わば諸概念に白黒をつけてゆくという方法が、この大著に、これを一気に読ませるだけの不思議なやさしさを添えているのだ。

それにしても不思議なのは、その不思議なやさしさである。たしかに誰でも、たとえば「世界-内-存在」と言われるよりは「世界の内に住んで居る」と言われた方がわかりやすいと思うであろう。しかし、そう言われてみたところで「住む」ということは、われわれが何となくわかっているというより以上には少しもわかりやすくなっていない。なぜ、われわれは最もむつかしい「住む」という思惟の事柄をたちまちやさしいものと思うのであろうか？これこそまさに存在忘却というよりほかしかたがないことなのだろうか？待望されていた本書を手にしたがら、われわれの思惟すべき事柄のむつかしさを改めて思い知らされる。

# 新刊案内

## 総記 (000)

雑誌、新聞、総かたろぐ

中小都市における公共図書館の運営

日本図書館協会

世界大百科事典 現代編

朝日新聞縮刷版 (1981. 2~'81/4)

岩波新書 149 新心理学入門 宮城 音彌

〃 150 現代日本法入門

渡辺洋三他

〃 151 修道院 今野 国雄

〃 152 自由民権 色川 大吉

〃 153 知の旅への誘い

中村雄二郎

〃 154 テニスを楽しむ

岡田 瑛

〃 155 都市と交通 岡 並木

〃 156 エンジンの話 熊谷清一郎

〃 157 不安の病理 笠原 馨

日本の白書 '81

三重県勢要覧 '80

三重 県

索引

ノーマン・

ナイト

現代読書論I書物と人生

紀田順一郎

〃 II書物と生活

〃

世界年鑑 '81

## 哲学 (100)

キルケゴールにおける自由と非自由

大谷 長

東洋の倫理

篠島 旭雄

現代の10大哲学

飯島 宗孝

西洋の10大哲学

〃

世界十五大哲学

大井 正

知識と論理

園田 毅直

哲学初歩

斎藤 信治

ルソー全集 別巻1

ルソー

〃 2

〃

キルケゴールの講話選集1

キルケ

ゴール

知能の心理学

ピアジェ

ものぐさ精神分析

岸田 秀

## 歴史 (200)

伊勢暴動未記

三重 県

女性のための古代史

音田 昌子

陸を歩く

井出 孫六

石川節子

沢地 久枝

西洋史4 西欧と世界

木村尚三郎

シルクロード 1-6

N H K

国史大辞典 第2巻

## 社会科学 (300)

外国為替入門

吉野 昌甫

日本統計索引

日外アソシ

エーツ

社会主義の新たな展望1、2

バーロ

日本の国債管理政策

中島 将隆

私的企業と社会的費用

K. W.

カッブ

T. V. A.

リリエン

ソール

理性的急進主義者の経済政策

J. E.

ミード

福祉社会の日本的形態

馬場啓之助

ソ連、東欧の経済

五井 一雄

ラディカル・エコノミックス

青木 昌彦

現代資本主義分析1・7・8・9

〃

置塩信雄他

経済発展の理論

シュム

ペーター

近代経済学と史的唯物論

山口 正之

経済学 上

サム

エルソン

The World in Figures

Causality in Economics

J. Hicks

Man Economy and State

M. Rothbard

Economic Issues of the Eighties

〃

N. M. Kamrany

The Glasgow Edition of the Works

and Correspondence of Adam Smith 3

W. P. D. Wightman

A. Methodological Appraisal of Mar-

xian Economics

M. Blaug

フリードマンの思想

西山 千明

新マルクス経済学講座5

島 恭彦他

現代の経済学書

L. シルク

ケインズ時代の終焉

R. スキデル

スキー

堀江正規著作集1-6 堀江 正規  
 サミュエルソン経済学大系4 藤原三代平  
 日本経済の落日 西山 千明  
 昭和前期農政経済名著集13、21  
 井上 晴丸  
 経済企画庁  
 経済要覧 '81  
 新経済7ヶ年計画  
 Marx Engels Gesamtausgabe II/3.5  
 Marx Engels II/2  
 現代日本の財政金融 小林 晃  
 日本国勢図会 '81  
 リカード全集1-10 リカード  
 国民経済計算年報 '81 経済企画庁  
 世界経済白書 '79、'80  
 現代経済を見る目 伊藤 幸一  
 経済政策入門 野田 稔  
 企業環境論 西尾 一郎  
 対米進出企業の労務管理のすべて  
 J・ネビンズ  
 イギリス法原理 ゲルダード  
 正義へのアクセス 小島 武司  
 民事執行法 三月 章  
 イングランド憲法史 メイトランド  
 現代の遺言問題 太田 武男  
 公法学研究上、下 杉村章三郎  
 判例注解地家賃統制令 建設省  
 講座 家族1・2・3・4・5・7 福島 正夫  
 ファシズム期の国家と社会1-8 東大社会科学研究所  
 日本の犯罪学 岩井弘融他  
 中国法制史研究 仁井田 陞  
 日本法史年表 熊谷開作他  
 六法全書 '81  
 現代商法入門 蓮井良毅他  
 行政法と環境法 宮本 忠  
 労働法 林 迪広  
 工業所有権、著作権と国際取引 土井 輝生  
 国際不正競争と国際法 入江啓四郎  
 国際経済紛争の争訟処理  
 米国海運労働慣行の研究 J・H・ボール  
 学校内暴力、家庭内暴力 似生 武他  
 二人っ子家族の親離れ子離れ 依田 明 他  
 教師の勘違い、タブー 牧 昌見

文学作品の読み方指導 宮崎 典男  
 自然科学 (400)  
 岩波講座 基礎数学24  
 細菌学、食品衛生学実験書 藤原喜久夫  
 他  
 よりよく生きるための食事学 秋山房雄他  
 癩うつ病の精神病理1 笠原 嘉  
 青年の精神病理2 小此木啓吾  
 衛生統計入門 一木 繁  
 食品衛生とは何か 柳沢文範他  
 栄養調理六法 '81  
 わかりやすい栄養診断 小町 喜男  
 磯谷式健康求命法 磯谷 公良  
 難病克服への道  
 顕微鏡写真と映画の写し方 中西 宥  
 工学及び家政学 (500)  
 きものの基本と常識 文化出版局  
 新独習シリーズ 和裁 石田 はる  
 和服裁縫 滝沢ヒロ子  
 やさしい和裁 主婦と生活社  
 ファッションデザイン入門 ブレンダ・  
 ネイラー  
 帯結び全書 装道きもの学院  
 服装造型 笠井美恵子  
 三重県環境白書 '79 '80  
 日本料理便覧 辻調理師学校  
 西洋料理便覧  
 服飾と生活 上村六郎他  
 服装概論 服装学研究会  
 食品工業と界面活性剤 氷室 寿  
 食品材料とその消費科学 浦上 智子  
 調理科学  
 図説、食品栄養学実験書 林 寛他  
 調理と衛生 宮沢 文雄  
 刺しゅうエンプロイダリー 星合千重子  
 実物大図案集  
 産 業 (600)  
 日本の食糧資源  
 芸 術 (700)  
 服装の色彩 千村 典生  
 日本の美術 '81/3~ '81/7  
 ルネッサンス夜話 高階 秀爾  
 日本の伝統的工芸産業 伊勢新聞社

語学 (800)

- |             |       |
|-------------|-------|
| 外来語々諺ものしり辞典 | 横井 忠夫 |
| 仏和大辞典       | 伊吹 武彦 |
| 日本語の世界5仮名   | 築島 裕  |
| 14散文の日本語    | 杉本秀太郎 |
| 心をはこぶ女性の手紙文 | 生方たつゑ |
| 英和中辞典       |       |

文学 (900)

- |                       |            |
|-----------------------|------------|
| フランス文学研究文献要覧1~4       |            |
| 思い出トランプ               | 向田 邦子      |
| ウォーターシップ・ダウンのうたぎたち上、下 | リチャード・アダムス |
| 井上ひさしエッセイ集            | 井上ひさし      |
| 陸人                    | 松本 清張      |
| 手鎖心中                  | 井上ひさし      |
| 飛鳥、そしてまだ見ぬ子へ          | 井村 和清      |
| 現代日本のユーモア文学1-6        | 吉行 彦之介     |
|                       | 他          |
| 日本文学史序説上、下            | 加藤 周一      |
| 中腰中也                  | 大岡 昇平      |
| わたしの出会った子どもたち         | 灰谷健次郎      |
| マリコ                   | 柳田 邦男      |
| 筑摩世界文学大系1 古代オリエント集    |            |
| フランス詩集                |            |

# ベストセラーズ

昭和56年6月29日付

日本読書新聞より

(紀伊国屋書店)

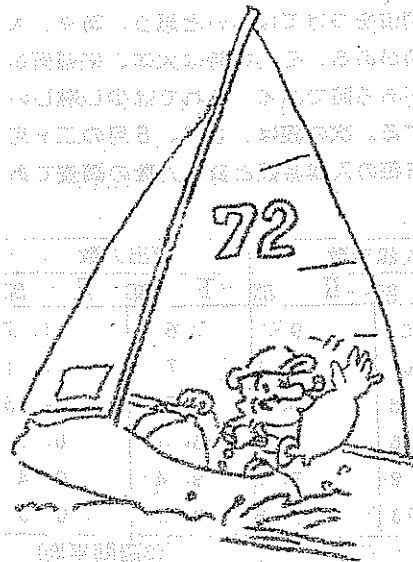
- |     |                           |
|-----|---------------------------|
| 東京  |                           |
| 1位  | 「窓ぎわのトットちゃん」黒柳 徹子         |
| 2位  | 「ありがとうの心」村井 順             |
| 3位  | 「日本よ何処へゆく」                |
| 4位  | 「心臓病で死なない本」石川 泰三          |
| 5位  | 「ヤンキー・サムライ・ジェントルマン」J・トーマス |
| 6位  | 「日本人の良心」村井 順              |
| 7位  | 「画家のまなざし」坂崎 乙郎            |
| 8位  | 「ムダな脂肪をメラメラ燃やす本」伊藤 雄康     |
| 9位  | 「小さな恋のものがたり・15」みつはし       |
|     | ちかこ                       |
| 10位 | 「タイムを読む」松本 道弘             |

名古屋

(ちくさ正文館)

- |     |                    |
|-----|--------------------|
| 1位  | 「窓ぎわのトットちゃん」黒柳 徹子  |
| 2位  | 「不安の病理」笠原 蒨        |
| 3位  | 「アクションカメラ術・2」馬場 憲治 |
| 4位  | 「中世の風景・下」阿部 阿部 護也  |
| 5位  | 「都市と交通」岡 並木        |
| 6位  | 「新戦争論」小室 直樹        |
| 7位  | 「人民中国の墜落」横山 宏章     |
| 8位  | 「知の旅への誘い」中島雄二郎     |
| 9位  | 「人類の希望」I・イリイチ      |
| 10位 | 「米國さらりーまん事情」松浦 秀明  |
| 大阪  | (旭屋書店)             |
| 1位  | 「窓ぎわのトットちゃん」黒柳 徹子  |
| 2位  | 「タイムを読む」松本 道弘      |
| 3位  | 「アクションカメラ術・2」馬場 憲治 |
| 4位  | 「基本19語の英語術」竹村 健一   |
| 5位  | 「もっと美しくやせられる」川崎 亨二 |
| 6位  | 「数学受験術指南」森 毅       |
| 7位  | 「ゼロ・サム社会」L・サロー     |
| 8位  | 「不安の病理」笠原 蒨        |
| 9位  | 「米國さらりーまん事情」松浦 秀明  |
| 10位 | 「日曜日の日本経済読本」       |

日本経済新聞社編



学生諸君へ

### 図書館利用のすすめ

学生時代に図書館に親しむことを覚えるのは実際の勉学の成果とともに、一つの重要な学習である。それは、図書館というところは、ただ本を静かに読むというだけではなく、文献の追跡をある程度まで可能にしてくれるところだからである。一つの主題について、どこまでその図書館で追跡が可能かということが図書館の価値を決めるくらいである。つまり、それくらい、重要なのがこの文献の追跡という仕事である。

そこで、学生時代に、図書館へ通いこの文献の追跡能力を養うということが成果の一つであるということになる。しかも、これは、明らかに学習性の能力であるから、学生時代に文献追跡の経験が有るか無いかによって、後の調査能力にかなり大きな差が出てくる。図書館は静かに勉強をする場所を提供しするが、その静寂さの奥には、諸君の踏査を待っている荒々しい密森のような世界が広がっていることを忘れないでほしい。

しかし、どのような利用の仕方であろうと図書館に足を運ぶというのはまず最初になければならないことである。「初めに会いありき」である。図書館の事務室から見ていると、利用する学生は大体きまっているようである。休み時間、休講の時間に図書館に足を運ぶ習慣をつけてほしいと思う。時々、大入りの時がある、そんな時は大体、来週何かの試験がある時である。これでは少し淋しい感じがする。次の表は、5月、6月の二ヶ月間の曜日毎の入館者数と貸出人数の調査である。

	入館者数		貸出人数	
	I 部	II 部	I 部	II 部
月	25	9	6	1.7
火	30	5.5	7	1.1
水	27.8	6.9	7	0.75
木	24.6	8.4	5.1	0.9
金	31.2	7.7	9.4	0.4
土	16.3	8.5	2.5	0.9

(8週間平均)

これを見るとI部では、火曜日、金曜日とい

ったところが比較的入館者が多く、法経科のゼミのある木曜日は、登校している学生の割には、入館者は少ない。法経科、家庭家のカリキュラムによって入館者数に変動があるようだ。また貸出し人数も、I部では金曜日が多く、週末に本を読むということの現われてもあろう。

II部の入館者数、貸出人数とも少ないのは開館時間、授業時間の関係で仕方がないようであるが、月曜日、土曜日に入館者が多いのは、II部の特徴であろう。また貸出人数の方も、月曜日が最も多いが、それでも、1.7人とわずかである。II部の学生の読書時間が少ないのは仕方がないとしても、もう少し貸出人数が増えても良いのではないか。もう一つ特徴的なのは、金曜日の貸出が少ないことである。昼は働き、夜は勉学に勤しむII部の学生にしてみれば、週末は読書からも開放されたいところだろうか。彼等にとっての週末は、まさに、一週間の活動の源なのであろう。

としょかんより

### 編集後記

完成までに随分時間がかかったような気がするし、思ったより早く出来たという気がするが、これは、準備に要した時間と、仕上げにかかった時間の比率を現わしているようである、思えば、この仕事を始めた頃は、図書館の窓から、まだ春の風とともに、新入生たちの頼りなげな掛け声がテニスコートから聞こえていたように思う、それが、いつのまにか梅雨も終ろうとしている、板につかない掛け声もどこかはつらつとしてきた。

慣れないタイプにすっかり若々しい目を痛めてしまった小田さんの顔もほころぼうというものだ。書架にうっすらと砂ほごりがたつようになると、いよいよ夏の到来である。

J. S. 記

原稿を募集します・・・

図書館だより第1号いかがでしたか、これからもよき図書館活動を行って行くために、皆様のなまの声を反映させて行きたいと思えます。「思い出の一冊」「書評」等なんでも結構です。原稿をお寄せ下さい。

図書館事務局